

渡辺曜の兄の日常

夜露

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

渡辺曜に兄がいたら…？

曜ちゃんの兄、渡辺蒼音の日常！

S a i n t S n o w、μ、sは出そうと思ってますが、虹学はまだ理解していないので…

T w i t t e rもいつも使ってるのとは別に作りました！

<https://mobile.twitter.com/Yotuyulovelive>

目次

蒼音の日常	1
バンドっていいよね	6
幼馴染とパツキンハーフにハグされたら、妹が不機嫌になりました	9
(豪) 雨の日	12
蔵を掃除するとまさかの物が出るよね	16
男達のライブ!	21
【特別編】 マリー誕生記念話!	25
巨大化	30

蒼音の日常

「お兄ちゃんおつきろー!!!」

朝から安眠を妨害する甲高い声が聞こえる。

「あと168時間…」

「それ1週間たつてるじゃん…」

「じゃなくて！起きないと学校遅刻するよ!？」

学校？いえ、いらぬ子ですね。（知らないんじゃない↑ここ重要）

「起きないと朝ごはん抜きだよ?」

「起きます起きます!!!それだけはご勘弁をー!!!」

「ふふつ、お兄ちゃんおはヨーソロー!」

「おは曜。朝から元気だなあ…」

起こしてくれたのは俺の妹の渡辺曜だ。可愛い。あ、シスコンじゃないからな!

「朝ごはん出来てるから食べちゃって〜」

うん。曜の料理は上手い。

俺自身も料理は出来るが、曜の方が上手い。

「お兄ちゃん早く行くよ〜」

「あいあいキャプテン」

「行つてきまーす!」

〜バスの中〜

「曜、寝るから学校に着いたら起こしてくれ」

「はあ、お兄ちゃんは相変わらずだねえ…」

呆れ口調で言われるが、これでも曜は起こしてくれるのだ!よし寝

r「あ、曜ちゃん、蒼音そうとくんおはよう!!!」

「うるさ…」

ああ、来ちまつたぜ…

アホみかん
高海千歌が…

「おはよう曜ちゃん、蒼音くん」

透き通るような声で挨拶するのは桜内梨子。東京から来たマジ美人。

「千歌ちゃん、梨子ちゃんおはヨーソロー!!!」

「おはよう梨子」「私は!?!」

「あ、いたんか」

「私に来て「うるさ…」って言ったよね!?!」

まあ、こいつが幼馴染の1人の高海千歌。スクールアイドルグループ「Aqours」の発起人。あとうるさい。うん、うるさい。

「今日もギター持ってきてるんだね!」

「ああ」

そう、俺はギターをしている。まー、いわゆるバンドマンだ。学校外の3人のバンドで、そのまんま男子が3人の組み合わせ。バンド名は「ラーズグリーズ」つーんだ。その男子二人は沼津の高校で、あいつらの為に言っておくが、ホモではない。

…と学校に着く。

校門に入った途端…

「シャイニ〜〜蒼ちゃん!」ハグツ

と、俺に抱きつくやつがいる。

「鞠莉、他の生徒いるからやめろっていつも言ってるだろ?」

「外国では当たり前のことよ?」

Aqoursハグ大好きウーマンの1人、小原鞠莉。金持ちでハ-

フ。何がとは言わないが、デカイ。

…じゃなくて、こんな奴が理事長で大丈夫か浦の星。

「ここは日本だ。そんな文化はないぞ。取り敢えず離れろ」

「もう!蒼ちゃんったら、恥ずかしがっちゃって〜」

なーんか、後ろから真っ黒なオーラが2つ…

「鞠莉ちゃんにお兄ちゃんは渡さないよ!」

「あんな事出来るなんて羨ましい!」

「曜ちゃん、梨子ちゃんどうしたの…?」

上履きを履いて校内に入る。入学当初は初めて、そして、唯一の男子だったので、キラキラした目で見られた。

え?なんで入学したかって?それは鞠莉が「1人、研究生が必要なんだけど、入らない?」って推して推して大変だった…

教室に入り、着席する。

数秒後来るのg「ハグウ！」

デスヨネー

「はあ、鞠莉もそうだけど、果南、お前もか」

「私の挨拶だよ！」

「お前の場合は暇な時いつも抱きついて来るだろっ！」

A q o u r s ハグ大好きウーマンのもう1人、そして俺の幼馴染、松浦果南。A q o u r s のオカンの立場っぽい。

「果南さん、はしたないですよ。」

と言うのが浦の星の生徒会長、黒澤ダイヤ。名前の如く堅i「失礼な事を言われてる気がしますわ」妹のルビィには超甘々。シsk「蒼音さん：？」

まー、ダイヤも幼馴染。

「ほら果南、離れろ」

もう俺鞠莉と果南の人形かな？

「そうですね果南さん。不純ですわ！」

「相変わらずダイヤは堅i「何か言いました？」ヒエツ、ナンデモナイヨ？」

〜放課後〜

俺は教室という強制収容所的なところが大嫌いなので、挨拶を済ませたらダツシユで部室に行く。

廊下を走るなど言うやつはビールでも飲んでリラックスしな（未成年）。

そして到着。安定の1番。速きことM i G | 25の如く！

そしてギターを弾く。

ドタドタドタ

バタンツッ！

「お兄ちゃんに負けたあ…」

「いつも早いよね！」

タツタツタ

「曜ちゃんたち速すぎ…」

「大丈夫か梨子？」

「だ、大丈夫！」

「なら良いけど」

(蒼音くんが私のこと心配してくれた！)

「？梨子、顔赤いぞ？」

「わ、私も走って暑くなっちゃったんだよ／＼／＼」

「曜ちゃん、私たち梨子ちゃんより雑に扱われてるよね？」(☒・ω

・☒) ムスツ

「うん」(つ、ー、c) ムスツ

ガチャ

「蒼音先輩と2年生の先輩たちは早いすら」

「こんにちは」

「クツクツク、リトル」善子ちゃん、そういうのいいすら」ヨハネ！と
いうか、全部言わせなさいよ！」

今来たのが1年生の国木田花丸、黒澤ルビイ、津島善k：「ヨハネ
！」ヨハネ。

で、花丸ちゃんは文型少女で、「ずら」が口癖。田舎っぽいけど、む
しろ可愛いよな。

ルビイちゃんはダイヤの妹。スクールアイドルが大好きなんだよ
な。ダイヤと反対で柔らかい感じ。

ヨハネはThe 厨二病。言ってることが全くわからん。リトル
デーモン？何それ美味しいの？

1年生の2人は可愛い系だけど、ヨハネは美人系だな。

因みに俺はバンドの練習が無い日はマネージャーしてるんだ。ど
うせ暇だしな。

ガチャ

「なんで同じ時間に終わったのに蒼音はそんな早いの？」

最後は3年生組。

「それはな果南。教室という強制収容所から脱出しなければと、瞬発
的にウルトラパワーが出せるからだ」

ぶつちやけ、世界史以外嫌いだし。教科書読めば分かるし。特に明

治維新くが好きなんだ。

「お兄ちゃんテスト前もほぼノー勉だね。課題も終わってるし」

「蒼音さん…？あなたは少し私とお話が必要なそうですね」ニコッ

「じ、自由を！さもなくて死を！」

「グチグチ言つてないでこっち来なさい！」

「ウワアアアアア!!!」

「さて、練習始めようか！」

…ダイヤにこつてり説教されました(´・ω・´)

チクシヨウメー！

バンドっつていいよね

ジャーン!

俺は今、所属しているロックバンドRadggridsラードズグリーズの2人と練習しているところだ。

「ラースグリーズ」っていうのは北歐神話に登場するヴァルキリーのひとり。

その名は「計画を壊す者」のほかにも「神々の平和」「専横する者」などさまざまに解釈される。

また、「戦いを終わらせる者」という意味があるぜ。

何故この名前にしたかって？

カッコいいだろ!?

因みにメンバーはエレキギターの俺。一応ベースもできる。声は甘め?ダンディーって言われる…

アコースティックギターの林龍之介はやしりゆうのすけ。たまにエレキもする。声はしゃがれた感じの声だ。

エレキベースの東堂智之とうどうともゆき。正にベースに愛された者じゃないのかな。うまい。声は天まで伸びる高音。ソプラノだ。

作詞は俺、作曲は智之、MCとかは龍之介。

龍之介は天然、馬鹿。智之はクールだが、ノリは良いぞ。

「さっきのいい感じじゃなかった?」

龍之介が言う。

「龍之介が少し走りすぎ。蒼音はいい感じ」

「ちえー、そうか」

こんな俺らだが、テレビ番組にも出たことがある。

まーまー人気…なんだ。

因みに俺らは全員がボーカルだ。

所謂スイッチボーカルっていうやつだ。

さっきまでやってた曲は「SWEAT&TEARS」。

スイッチボーカルのやつと智之のやつがある。

「いったん休憩にしねーか?なんか疲れた」

「さんせー！」

「そうだな、休憩にするか」

そうそう、龍之介は内浦の海に自分のアコギをボツシユートしたことがあつたぞ。

マジで馬鹿。

ppp...

「ん、電話だ」

えーと、どれどれ…

【曜】

あれ、曜からだ。何かあつたのか？

「どうした曜？」

『お兄ちゃん？急なんだけど、千歌ちゃんと果南ちゃんが泊まりに来ることになつたからよろしくね！』

oh... マジか。

「なんだつて？」

「友達が泊まりに来るんだつてさ」

「じゃ、今日の練習はこの辺で終わりにするか？」

智之さんマジ優しいっす。

「そうだな。今日はここまでにして、次にたくさん練習することにしようか」

全く、二人とも良い奴かよ。まあ、果南はいいとして、千歌の相手は疲れるんだよなあ…

果南はハグさせときゃいいいな。

曜に電話しておくか

ppp...

「もしもし曜か？」

『そうだよ。お兄ちゃんどうしたの？』

「練習終わったからこれから帰るな」

『うん！それじゃあね！』

〜

「それじゃあな！」

「おう！」

2人と別れ、家に帰る。家に帰っても疲れるんだろなあ…

「蒼音くん！」

「ハグウ！」

案の定滅茶苦茶疲れました（・ω・）

幼馴染とパツキンハーフにハグされたら、妹が不機嫌になりました

「1, 2, 3, 4…」

Aqoursの9人は練習している。まーダンスだったら、果南が一番うまく見えるな。他のみんなもうまいけども。

「そういや、みんな「Aqours」って最初からちゃんと読めたかい？おじさんは「アクオス」って読んでしまったよ…」

「おかげで曜に怒られたよ。千歌もいたら更に長かったかもな。家でよかった（確信）」

「いったん休憩しよっか」

果南が言う。

「お兄ちゃん」

と、曜がすり寄ってくる。全く、可愛い妹だぜ！

「おうおう、お疲れ曜。はい、水」

「ありがと！」

ま、水って言ってもスポーツドリンクなんですけどね。

そんな事思ってたら後ろから急に…

「ハグウ！」

と抱きつかれた。この声と豊かな双丘…

「果南、急にどうした？」

「ハグしたいからしてるだけ」

「お、おう」

最強のハグ理論を展開する果南。

「あー！果南ちゃん、蒼音くんにハグしてるー！」

「ずるいですなー！」

警備員登場。

横で騒ぐ警備員（千歌と曜）を見てたら、前からハグされた。

ま、果南以外ならあの人しかいないよなあ…

「なあ、鞠莉」

「どうしたの蒼ちゃん？」

「どうして君も俺に抱きついていているんだい？」

「蒼ちゃんが大好きだから！」

「アツハイ」

大好きって普通に言ってくるから凄いやなあ…

因みにダイヤはまだ気付いていない模様。

まあ、この二人を力づくで引き剥がすことは出来るんだけど、それはそれでなんか可哀想なんだよなあ…

あれ？ 曜と梨子がチラチラ見てるな…

どうしたんだ？

「は、破廉恥ですわよお二人とも！」

あ、やつとダイヤ気付いたか。

「えく、良いじゃんダイヤく」

「ホント、硬度10なんだから！」

「だ・れ・が！ 硬度10ですか！」

二人は俺に抱きつきながら、ダイヤに反抗する。

「そうだよ！ 果南ちゃん、鞠莉ちゃん！ ずるいよ！」

そこではないよ、千歌君。

「早くお兄ちゃんから離れるのだから！」

曜は頬を膨らませながら言う。

「果南ちゃんと鞠莉ちゃんが離れないと練習再開出来ないから…」

梨子も参戦。

何が始まるんです？

第三次大戦だ！

「2年生にも言われてるではありませんか！ 練習再開しますわよ！」

「はーい…」

「仕方ないわねえ…」

第三次大戦はダイヤ・2年生軍の勝利で幕を閉じた。

「帰るときにハグね！」

「アツ…ハイ…」

ハグ地獄はまだ終わりそうにもなかった。

くく

かなまりのハグを終えた後、曜と二人で帰っていた。

「むく」

曜があからさまな不機嫌オーラを出している。

「どうした曜？」

「お兄ちゃん、果南ちゃんと鞠莉ちゃんにハグされてるとき、鼻の下が伸びてたよ。それに抵抗もしてなかったし」

「そりゃあ、果南も鞠莉も練習で疲れてるって思ってたな」

「私にはやってくれないんだ」

「曜は抱きついてこなかっただろ」

「だって…みんなの前じゃできないよ」

曜がうつむく。

「曜、ごめんな。かまえなくて。今日は一緒に寝てやるから」

「ホント!?お兄ちゃん!」

曜の顔が一瞬にして明るくなる。

そんなにうれしいか？

「…えへへくお兄ちゃんと一緒に寝れる…」ボソツ

「曜?どうかしたか?」

「な、なんでもないよ!」

寝るとき、曜ちゃんが満面の笑みの蒼音くんの部屋に入ってきたそうなの。

(豪) 雨の日

梅雨って言っても、夏季と同じくらい降水量な気がするの俺だけか…？

まー、そんなことは置いといて、今は千歌の家にいる。

曜と一緒に千歌の家に遊びに行ったのだが…

ザーザーザーザー

「雨、すごいねえ…」

「やむ気配なんてしないね…」

そう、豪雨にあっってしまったのだ。

家に帰ってギター触りたかったのに！

畜生め！

…駄々こねても仕方がないので、これからどうしようか考える。

志満さんに車で送ってもらうにしてもこの雨は危なすぎる。

「うーん…」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「いや、これからどうしようかとな…」

「この雨だと帰れなさそうだもんね…」

超巨大台風並みじゃないのか？この雨は。

そんな事思ったら千歌が

「うちに泊まっていけばいいじゃん」

と言い出した。

「でも迷惑かけるのもなんだかな…」

と俺が言うと

「志満ねえは大丈夫だって」

…志満さんマジ感謝っす。

「でもお兄ちゃん、着替えはどうするの？」

「今日の着るから良いよ。曜は？」

「私は千歌ちゃんの借りるから良いけど、お兄ちゃんがそれだと…」

「浴衣着れば良いじゃん！」

何言ってるのかな？このみかんヘッドは。

「志満ねえに聞いてくる！」ダツシユ

「ちよつ…千歌！」

「お兄ちゃん、諦めよう。あのブルドーザーの様な千歌ちゃんを止められる？」

「無理だな」

でも、曜も千歌も繊細なんだよなあ。

まあ、女の子だから当たり前だけど。

タタタ…

「志満ねえが持つて行つてつて」

千歌が浴衣を持つてきてくれた。

…志満さんに後でお礼を言つとこう。

「お兄ちゃん、お母さんも危ないから千歌ちゃん家にお世話になつてつて」

お風呂や夕食を高海家でごちそうになった。

あ、ちゃんと志満さんにはお礼を言つたよ。

まあ、夕食の時に言つたから、高海家に言つたの方が正しいかもしれないけど。

夕食後に志満さんが

「千歌ちゃんは蒼音くんのお嫁さんになれるかしら…」

と言つて俺は消防車の様にお茶を吹き出してしまったよ。

そして、千歌つて俺に好意持つてんのか?と思つた。

今は三人で同寝るか会議しているのだが…

(因みに千歌の部屋な)

「お兄ちゃん(蒼音くん)と一緒に寝るの!!!」

「お前らなあ…」

幼馴染とはいえ、俺も男なんだけどなあ…

この二人が将来悪い男らに引つかからないか心配だ…

それにこの二人は普通に見て美人な上、可愛い。

俺もこの二人を女の子として見ている訳で。

「いやでもなあ、俺だつて男なんだよ?」

「…?だから?」

いや、千歌さん清々しい程の天然だ。

流石内浦の海で育っただけあるな。

関心関心。

「あっ…／＼／＼」

うちの妹は何なのか察したらしい。

でも、顔を赤らめている分、純粹さは残っているんだろうな。

ここに鞠莉と二人きりだったら…

うん、俺の何が危ない。

何かが↑重要

「ねえ、良いじゃん、一緒に寝ようよお」

「ち、千歌ちゃんの言う通りだよお兄ちゃん／＼」

あれ？曜さん、顔真つ赤なのに…

はあ、もう遊び疲れて眠いし、ここは折れてやるか、仕方ない…

「もうわかったよ、一緒に寝てやるよ」

「やった〜!!!」ハグウ！

二人が抱きついてきたけど、まりかなの影響か？

因みに、千歌の部屋に布団を敷いて寝た。

俺が真ん中だったの言うまでもない。

くく

朝

昨日の空を覆っていた分厚い入道雲はどっか行って、青空が見えた。

そこでクエスチョンタイム！

俺は体を起こそうとするが起こせません！

さして、どうしてでしょうか？

正解は千歌と曜に左右から抱きつかれているからでした
まあ、俺らを起こしに来た志満さんに

「あら〜、」

と誤解された。

仕方ないじゃん！

折れるしか選択肢がなかったんだから！

「んあ、お兄ちゃんおはよお〜」

「おは曜」

というか珍しく寝ぼけてんな曜。

「zzz…」

千歌に至っては起きようともしない…

蔵を掃除するとまさかの物が出るよね

「蒼音さん、果南さん」

「(。・ω・)ん？」

「どうしたのダイヤ？」

「たまたま生徒会室に遊びに行ってた俺と果南。

遊びに行ってたと言っても、ダイヤが忙しそうなら手伝うぞ。

「私の家に大きな蔵があるでしょう？」

「あー、あれがどうかしたのか？」

「それを片付けようとしているのですが…」

「ルビイちゃんと二人じゃキツイと判断して」

「二力のある俺（私）を動員して手伝ってもらおうと」

「そ、そういうことですわ」

果南は筋肉モリモリマッチョウーマンだからな。

因みに俺はライブで機材を持ったりするんで、筋肉はあるほうだ。

「一応、曜も誘つとくよ」

「ありがとうございますわ」

「鞠莉…はいいか…」

「あの人がいたら終わるものも終わりませんわ！」

「お、おう」

「それでは、次の日曜日によろしくお願いしますわ」

くく

渡辺家

俺は俺の太ももの上に座っている曜に話しかける。

「なー曜」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「次の日曜日空いてるか？」

「特に用事はないけど…」

「どうしたの？」

「黒澤家の蔵を掃除するから手伝ってくれないか？」

「全然良いよ！お兄ちゃんと一緒だし…」

最後の辺は聞こえなかったけど、曜も手伝ってくれるそうだし、あとでアイスでも買ってやろう。

くく

日曜日

「この蔵の掃除だけに集まって下さり、ありがとうございます」

「うん」

「うゆー!」

「ヨーソロー!」

「では、片付けの手順を…」もう、ダイヤつてばなんでマリーも誘ってくれなかったわけ?!」鞠莉さん!」

トラブルメーカーがやってきた。

鞠莉もやるときはやるんだけど、普段の行いがなあ…
にしても、なんで知ってるんだ?

「あ、あの、ルビイが呼んだんです…」

果南さんや蒼音さんが来るっておねいちゃんが言うから…」

「もう、良いんじゃないかね?」

「人手が増えるしな」

「そ、そうですね…」

ダイヤも仕方ないと言ってくれた。

「蒼ちゃん、シャイニー★」ハグッ

「あ!鞠莉ちゃんがお兄ちゃんに抱きついてるー!」プクー

「ズルい!私もっ!」ハグッ

「ちよっ…お前らなあ…」

「ピギイ…だ、大胆…」

二人が抱きつくから、曜は更に膨れて破裂しそうだし、ルビイちゃんは大胆さにビックリしてるよ…

「ぶつぶーですわ!」

ダイヤの説教が始まった。

まあ、まりかなが一方的に俺に抱きついてきただけなんだけどさ。

「すまないダイヤ。助かった」

「まだ学生の身分なので、節度を持ってほしいものです」

「そうだなあ」

早速スタートダッシュが決まらなかったが、蔵の掃除が始まった。

「はー、よいしょ〜」

「お兄ちゃんおじいさんみたい…」

「重いから仕方ないだろー!」

外に運び出すのを、俺、曜、果南、鞠莉の三人がやって、中身の確認を黒澤姉妹がやっている。

蔵の中にあつたのは桐タンスとかだな。

あとは日本刀、猟銃もあつた。

ダイヤのひーじーちゃんか猟師だつたそうなの。

あ、大判小判もあつた。

凄いな黒澤家。

「お昼にしましょう」

というダイヤの一声で俺らは昼食兼休憩にした。

「うえ〜疲れた〜」

「ふふつ、お疲れ様ですわ」

「蒼ちゃん〜」

「暑苦しくなるから、ハグは禁止」

「蒼音のいけず〜」

因みに昼食は冷やし中華だつたゾ。

おいしかった。

〜

「後半戦!ですわ!」

「「「おー!」」」

午前中は半分片付いたから、午後はもう半分だ。

と意気込んだ時、

「は、ハグウ!」ハグッ

「うえ?!どうした果南?」

「に、2階にい…」

「もう〜、果南ったら可愛いわ〜」

2階に偵察に行った曜が帰ってきた。

「この般若のお面とこのお面じゃないのかな？」

「あく、能面か」

曜が持ってきたのは般若の面と増女ぞうおんなの面だ。

確かに怖いな。

「果南、もう大丈夫だぞ」

「ほんとう？」

ヤバ、目を潤ませて上目遣いしてくる果南が可愛い。

あと、曜はまた頬を膨らませてる。

くく

あの後には特に弊害もなく終わった。

まー、お金になりそうなものが多いわけな。

日本刀、猟銃、大判小判、誰かの浮世絵、美人画などなど。

見た感じ保存状態は良さそうだ。

「皆さん、今日は本当にありがとうございました。蔵を掃除出来て良かったですわ」

「冒険してる感じで楽しかったわく」

「発掘されたのもすごいのが多いな」

ま、久しぶりにビビり果南が見れて良かったしな。

くく

帰り道

「お兄ちゃん、鞠莉ちゃんと果南ちゃんにハグされて嬉しそうだったね」ムスウ

「どこをどう見たらそう言えるんだ…」

おかげで疲れましたよ。

「家に帰ったら、たくさん構ってね！

そんじやないと許さないからね！」

「仰せのままに、お嬢様」

「よろしいー！」

ぶつちやけ、家帰ってゆっくりしたいんだけど、今日はそんなに曜に構えなかったから仕方ないか。

く
く

家に帰った後いっぱい構ってやった。

男達のライブ！

「涙を拭いて立ち上がるのさ…」

えーとですね、今俺たち3人はライブをしています。Aqoursの9人も招待して。

結構大きな野外ライブ会場でライブをやっているんだが…

俺の衣装ね、凄いことになってる。

ア○レンの加賀が男になった感じになってる。

髪の毛は全体的に白く染めて、毛先を青く染めてるよ。

ダイヤに何言われるかわからんが…

しっかし、意外に動きやすい。

あ、智之がスーツみたいなやつで、龍之介がTシャツとジーンズ。

俺の場合、衣装さんが

「どうぞすこれー！」

って目を輝かせながら言っていたもんだからさ…

まあ、あの9人がどんな反応をするか見たいからさ。

勿論、Aqoursの9人な。

招待して、関係者席に座ってる…

他に作詞、作曲の参考になればいいかなーって。

「今こそ立ち上がるのさ…」

ただいまの曲は「ラジカル・ティーンエイジャー」。

智之がボーカルの歌だ。

「ありがとう！」

ワアアアアアアア!!

くく

ライブは熱かった…

みんな元気な…

「ちよつとあいつらの部屋行ってくるわ。もう解散で良いぞー」

「あいよ」

「いてらー！」

まあ、あいつらはあいつらだよ。

因みに着替え不行ってる。

コンコン

ドウゾー!

ガチャ

「よっ」

「「「「「蒼音(くん)！」」」」」」

「はい?」

「その髪の毛!どうしたの!」

よ、曜さん、近いっす…

「そうですね!目立ちすぎです!」

あのね、そういう目的っていうか、熱狂させるために必要なですよ?!

「でも、結構似合ってるから良いんじゃないのかしら」

「鞠莉ちゃんの言う通りだよ」

「流石我がリト」そういうのいいっす」なんでよ!」

「ずら」

「うゆ」

「ハグウ」

ギルキス組は今回良いとして、後ろの三人は何なんだ。

「蒼音くん!」ズイツ

「な、なんです千歌さん」

迫ってくるみかん…

「なんでみかん色にしなかったの?!」

「…はい?」

(((((千歌ちゃん、そこじゃないよ…)))

流石…

頭のみかんがたつぷり詰まった千歌さんにはかないませんわ。

「この衣装とみかん色の頭は似合わないぞ」

「みかんを貶したね!」

「ちげーよバカ千歌」

「それよりもなんでその髪にしたの?」

「衣装さんがどうせならって、髪まで染めちゃったんだよ。別に良いけど」

ホントノリノリだったぞ。

「むー、お兄ちゃんと一緒にじゃなくなっちゃうじゃん！」

あ、案外可愛い理由だけど、染めちゃったのは仕方ないので、落ちるまでこのまんまでいようかなん？

「にしても、凄い衣装だね。作るの大変そ〜」

と果南が言う。

「動きずらくないの？」

「意外に動きやすいぞ。」

…そういえばちかりこはなんか参考になったかな？」

「うん！今度は『ろっく』な歌詞にする！」

「千歌ちゃん…」

なんかふざけた歌詞を書きそうだが、俺は手伝ったりしないぞ。だって、彼女たちの歌がなくなってしまうかもしれないからだ。

俺は俺の歌詞で、彼女らは彼女らの歌詞でっていうのが俺の考えだ。

「ルビィちゃんたちはどうだった？」

「凄い色んな人が盛り上がってました！」

「未来ずらー！」

「お、おう」

流石一年生。個性的だな。

「蒼音さん！次の登校日までにその髪を…「まーまーいいじゃないダイヤ〜」むっ」

「そうだよ。それになんか新鮮だし」

皆肯定的だな〜。

〜

後日

教師に

「また違った感じが…」

って言われたくらい。教師も寛容だなあ…

因みに曜はなんとか納得してくれた。

「えへへ、お兄ちゃん大好き！」

だそうです。別にやましいことはしてないぞ！

そういや、龍之介と智之、どっちも恋人いるんやで。

…いいもん！俺には曜がいるから！

…シスコンみたいだなあ…

【特別編】 マリー誕生記念話！

やあ、みんな。

今、俺と曜は鞠莉のホテルにいる。

え？何故って…

「今日はマリーの誕生日パーティーに来てくれて、ありがと〜！」
っていうこと。

にしても流石小原家。すっげえ豪華。何がって、言わなくても分かると思うぞ…

「あ、蒼音さん、こんにちは」

「兄様ー」

S a i n t S n o w の 2 人も来てくれます。はるばる函館から。

なんか理亞には兄様って呼ばれてる。

えーと、東京でこの2人がナンパされてる時に、助けてからこう呼ばれるようになったぞ。

最初は曜が睨んでたけどね…

「未来ずら〜！」

って花丸ちゃん…

そもそも料理も12人で食えんのかよって量だぜ!?

ケーキはクソデケエ…

ブルジュ・ハリファかよ。

これがブルジョワジー！資本主義！ニューデール政策！マーシャル・プラン！

おっと、後ろの2つは米国の政策か…

まあ、そんなことは置いといて、

「これもおいしいぞら〜！」

「蒼音くん！これ美味しい！」

「お兄ちゃんお兄ちゃん！」

この3人がめっちゃ食ってる。

あれ？意外にイケるかも…

「あはは…凄いなあの3人…」

「そういう果南は食ってんのか…？」

「って聞くまでもなかったな」

「？」

果南のやつも山盛りだぜ。

あの3人とは違って果南のはしっかりバランスがとれてる。その辺はしっかりしてるな。

「果南は良いお嫁さんになれそうだな」

「もうく／＼／＼」

おっと、声に出てたか…

気をつけねえと。

「蒼ちゃん！」ハグウ！

「うおっ！」

鞠莉が後ろから抱きついてくる。

果南も鞠莉も抱きつくの好きだな

まあ、いつもはすぐ振り払うんだけど、今日は鞠莉の誕生日だし…

「(？・ω・？)ジー」

ちよつと曜さん？そんな鋭い眼光で見ないでください！

というか、今日くらいは許してやれよ！

いつも俺に抱きついてるだろ…って言ったら鞠莉も果南も含まれるな…

「あれ？今日は振り払わないの？」

「変な物食った？って感じで言うな。鞠莉の誕生日の今日位はな…」

「優しい蒼ちゃん大好き！」

「はいはい」

「もう、マリーは本当に蒼ちゃんの事が大好きなのよ？」

恥ずかしがらずに良く言えるよな。

流星にあの果南も顔赤くしてたのに。

欧米人とかは普通にキスとかするけど、日本人は「恥じらい」があるからなあ…

「私もあれくらいアタックしないといけないのかしら…」

「もつとハグしないと…」

「蒼音さんの好きな料理ってなんでしよう…」

「リトルデーモン…」

「なんか4人位なんか言ってる気がするけど、聞こえん！」

「もく、蒼ちやくん」

くく

「はい、鞠莉ちゃん！」

「いつもありがとね！」

「ありがと千歌っち〜！」ハグッ！

「今、みんなが鞠莉にプレゼントをあげてるわけですけど、俺は曜と選んだんだ。」

ツンベルギアと桔梗の花をプレゼントにしたぞ。

花言葉はツンベルギアが美しい瞳、黒い瞳。

花の中心に人を惹きつける瞳のような黒点があることに由来しているんだ。

紫の桔梗の花言葉は「気品」という意味らしい。

ま、こういうのは意外に乙女な曜が調べた。

「私達からはツンベルギアと桔梗の花束だよ！」

「いつも妹達の面倒ありがとな」

全く、俺っぽくもないぜ…

「2人ともThank you！」ハグッ！

「ふっふっふ、俺からはまだあるんだな〜」

「What!?!」

「鞠莉に捧げる、

『至上の愛』」

くく

演奏後

「蒼ちゃんありがと〜!!!」

「そう言う鞠莉に近づき、俺は

「誕生日おめでとう、鞠莉」チュッ

「ワーオ！これは思いもよらないサプライズだわ！／／／」

俺のヘタレ根性見たか！

鞠莉も顔真つ赤だ。

そう、俺は鞠莉にキスをしたのだ。

…別に鞠莉が嫌いな訳じゃ無いしな…

「そ、蒼音くんが…」

「お兄ちゃんが…」

「ま、鞠莉に…」

「キスを…」

「これは…」

くく

この後俺は皆に問い詰められたよ。

鞠莉は顔真つ赤のまんまだし。

曜がまた機嫌悪くなつて

「じゃあ、私にキスして！」

って言い出すし…

くく

鞠莉の誕生日パーティーの後、

「俺の演奏、どうだった？」

「Excitingな演奏だったわ！それに、まさかのサプライズも

あつたしね／＼／＼」

あ、また顔赤くしてる。

こういう鞠莉は新鮮だな。

「あのな、鞠莉」

「?どうしたの?」

「俺は鞠莉の事が好きだ。」

この青い地球の、あの大きな宇宙の誰よりも、鞠莉のことが大好きだ。

俺と…付き合ってくれませんか？」

「…」

また、やられちゃったわね…

でも、マリーの気持ちだが、想いが、蒼ちゃんに届いたのかしらね。蒼ちゃん、いや、蒼音さん、私も貴方の事が大好きです。

こちらこそ、不束者ですが、よろしくお願いします！」

くく

俺達は晴れて恋人関係になった訳だが…

「蒼ちゃん！イタリアへ行くわよ！」

「イタリア!?!」

鞠莉の両親に会いに行くんだって。

行動力すげえよ…

巨大化

ppppp…

「あい？」

「そ、そ、そ、そ、蒼音さん！」

今すぐ黒澤家に来てくださいますし！」

「ちよ、だ！」「ブチッ」…行くか…」

朝から凄い反応をするダイヤから電話がありました…

さて、行く準備でもするか…

「曜く、ちよつとダイヤんち行つてくるわ」

「え!!お兄ちゃんが行くなら私も行く！」

「お、おう」

なんだかよくわからないが、曜も行くらしい。

…にしても、何があつたんだ…?

くく

黒澤家

「おっす」

「おはヨーソロー！」

「相変わらずそれなのな…」

「よ、良かったですわ！さ、中へ！」

本当に何があつたんだ…黒澤家に…

くく

「にしても何があつたんだダイヤ？」

「ルビィが…ルビィが…」

「ルビィちゃんが？」

「まあ…見てくれれば分かると思えますわ…」

「??」

「ルビィ、入りますわ」

「うゆ…」

…。(。ω。ん?)

なんーか、いつものルビィちゃんの声と違う気が…

スーッ

「ルビイちゃん、おはヨソソ…ロー!!」

「ん?どうした…よ…う…!!」

目の前にいたのは…

「おはよう!曜ちゃん!蒼音くん!」

「ルビイ…ちゃん…だよね…?」

「そうだよ!」

…目の前にいるのは鞠莉や果南のようなグラマラスなボディのルビイちゃんだったのだ。

隣ではダイヤが

「ルビイがこんな成長するのにわたくしは…」

と言っていたり、曜が

「ルビイちゃん、嬉しそうだね!」

と言っていたり。

確かに嬉しそうだな。

背も大きくなってるし。ダイヤと同じくらいか…

体は…姉妹でこんなにも違うのか…

ああ、ダイヤ泣かないで…

「なあ、あれは誰の服なんだ?」

「一応わたくしなのですが…うう…」

「ごめん、聞いた俺が悪かった」

…というか、将来のルビイちゃんはこうなのかと思っていたら…

ピンポン

「…行つてきますわ」

「お、おう」

シャイニー★

マリサン!?

うん、鞠莉が来た時点で嫌な予感がするなオイ。

くく

「あ、蒼ちゃん!」ダギツ

はい、鞠莉が入って来ました。ハグされなう。

「む〜」

曜とルビイちゃん…？

「もしかして、鞠莉さん。こんなにルビイが成長した理由を知っている？」

「Yes!」

「やっぱお前か。というか、もう離れてくれよ。もういいだろ？」

「negative!」

「駄々っ子かお前は」

まあ、なんとなくわかってたよ…

「何故私の可愛いルビイがこんなになったのですか！しかも！なんで私より成長しているのですか！」

…気にしてたんだねえ…（；ω；）ウウウ

「うゆゆゆゆ？」

「えーとね…昨日…」

〜

「ルビイ！」

「どうしたの鞠莉ちゃん？」

「たまたまカバンにキャンディ入ってからあげるわ！」

「わあい！ありがとう鞠莉ちゃん！」

「you're welcome!」

〜

「それであと分かった訳か…

　　というかなんでそんなものを持っているのか俺には全くわからな
　　いんだけど。因みに効果は大きくなるだけか？」

「えーとね、確か食べた人が3年後の姿になるっていう効果だったか
　　しら？」

「負け…ましたわ…」ガク…

「ルビイ、こんなに大きくなれるんだね…!」

背は鞠莉より少し低いが、容姿は劣ってないな。凄い。

…ダイヤには抹茶味のアイスでもあげよう…

「お兄ちゃん、私もルビイちゃんみたいになるかな!？」

「どうだろうな。食う寝る遊ぶをちゃんとしてたらなるんじゃないか？」

しかし、思うことが一つあるよな。

「鞠莉、ルビィちゃんはいつ元に戻るんだ？」

「うーん、分かんないけど明日には戻るんじゃない？」

「オイコラ」

「でもさ、お兄ちゃん。ルビィちゃんは喜んでることだし良いんじゃない？」

「そうなんだけど、ほら戻らないとき、ライブの衣装とかな？」

「確かに…」

「うゆ…」

鞠莉が軽率な行動をするからこうなるんだよなあ…

とりあえず今はこれからのルビィちゃんについて考えなければ。

「鞠莉が言うには明日効果が切れるらしいが、今日切れるかもしれないし明後日切れるかもしれない。下手したら一週間後かもしれない。

まあ、鞠莉が言うことは当てにしない方が良いからな」

「!?」

「その通りですわ。そして不確定要素が多すぎますわ」

「ちよつと！マリーの言うことを当てにしても良いじゃない！」

いや、だつてだねえ小原君。

「あなたにしてやられた悪行はわたくしの脳内に焼き付いているのですよー」

「うっ…」

「つていうことだ鞠莉。諦めろ…」

くく

さて、会議は2時間くらい続いた。鞠莉が途中で寝てダイヤに説教されていたりしたぞ。

まとめるととりあえず明日まで待ってみようということになった。とにかく情報がないからね。

「結局私が言ってたことになったじゃない！」

「まあ、とりあえずはね」

「ごめんね蒼音くん。ルビイのせいで朝早くに家まで来てもらっちゃって…」

「そんなのは良いんだよ。まさかの事態だからね。ましてや知り合いがこうなると誰でも飛んでいくと思うよ。だから謝らなくていいよ」

「ありがとう蒼音くん…!」

「む…」

ルビイちゃんも慰めていると曜がこれでもかというほどほっぺたを膨らませていた。リスかな？

くく

渡辺家

「♪〜」

どうしてこうなった

曜が「今日はルビイちゃん達と一緒にいたんだから、家に帰ったら私に構ってね!!!」って…

というわけで今は俺の足の上に座った曜が楽しそうにテレビを観ている。曜って意外に軽い「お兄ちゃん変な事考えてなかった?」「イエナンデモ!」

たまに曜って構え怒るんだよねえ…なんでだろ。

くく

次の日

「うゆ!」

「良かったねルビイちゃん!」

「うう…ルビイが…ルビイが戻ってきました…私の知ってるルビイが…」

「ね!マリーーの言った通りだったでしょ!」

「お前は軽すぎるんだよアホ!」ゴツン!

「いったらいい!私も女の子なのよ!?!」

「んなもん知るか!」

ルビイちゃんが元に戻って良かった。にしても小原家、なんてもん作ってんだ…ブルジョワジーの闇だな…

「やっぱり、今の体の方が落ち着くなあ…」